

episode 44 『おさじさん』を読む私と、母が重なるとき

投稿者　水澤 ひなた さま（東京都）



『おさじさん』
松谷みよ子 文
東光寺 啓 絵
童心社　1969年

幼いころ、わたしはいい子ではなかったように思う。わがままだったし、泣き虫だった。
思春期には反抗期もきた。けれど、母は「とってもいい子だったよ」と、大人になったわたしに言う。
「ほんとうに かわいかったんだよ」と、笑顔で。

2022年6月。わたしは、はじめての出産をした。
慣れない育児に試行錯誤しているうちに、赤ちゃんだったぼうやは、あっという間に成長。
気づいたら1歳になっていた。最近は、ちいさなおててで絵本をつかみ、わたしの膝にちょこんと座る。
そして、「あう」と一言。「読んで」ということだ。

「ぼくはおさじさん。おいしいものをおくちへはこぶ、きしゃぽっぽ」
松谷みよ子さんの『おさじさん』は、とてもやさしい物語だ。
おかゆを食べたいうさぎさんのもとに、おさじさんがきて、あついおかゆを口元まで運んであげる。

子どものころ、わたしも母に『おさじさん』を繰り返し読んでもらった。
年を重ねても、どうしてもこの絵本だけは手放せず、引越しがあるたび丁寧に段ボールに詰めて、新居に運んだ。

そしていま、母がわたしに読んでくれたものと同じ本を、ぼうやに読んであげている。
「おかゆ、おいしそうだねぇ」 膝に座るぼうやから、じわじわと熱が伝わってくる。
絵本に出てくるうさぎさんみたいに、まだまだ小さくて、かわいいぼうや。
鼻をくすぐる太陽みたいなにおい。向けてくれる笑顔。なんて愛らしいんだろう。
ぼうやの存在を噛み締めているなかで、ふと、母の言葉がよみがえる。「ほんとうに、かわいかったんだよ」。
ああ、と納得する。そうだったんだね、お母さん。母のやさしさからくる言葉だと思っていた。
けれど、幼いわたしとの時間は、きっとほんとうに尊いものだったのではないかな。そうだと、いいな。
ぼうやに『おさじさん』を読んでいるわたしと、
わたしに『おさじさん』を読んでいる母が、ほんの少しだけ重なる。
お母さん、ほんとうにかわいいね。涙が出ちゃうくらい、宝物だね。

「絵本の日アワードin FUKUOKA 2023」投稿作品より

本連載は「医療法人元気が湧く」が主催する“絵本の日アワード”に応募された作品を掲載していきます。毎年、300～450編の応募がある「絵本にまつわるエピソード」の作品から、「絵本の魅力」と「絵本のチカラ」のつまったエピソードを選び、その魅力と感動を読者の方々にも共有していただきたいと願って、投稿者の了解を得て紹介しています。
さらに、人に影響を及ぼした絵本のバックグラウンドについて、司書の専門的な視点による解説を加え、一冊の絵本をある部分では“深く”、そしてある部分では“広く”、興味を広げていただきたいと企画しました。

日本でイチバン売れている絵本「ばあ」

日本で一番売れている絵本といえば、1967年に初版が発売された『いないいないばあ』(童心社)です。株式会社トーハンが発行している「ミリオンぶっく2026」によると、累計出版部数が764万部を突破した、赤ちゃん絵本の草分けです。来年2027年に出版60周年を迎える、ロングセラー絵本の代表格でもあります。

「赤ちゃんに精神が芽生え始めたこの時期に、美しい日本語を伝えたいし、よい絵本で育てたい」と考えていた松谷みよ子氏は、2人目の子どもを授かったとき、赤ちゃん絵本をつくろうと決心します。そんな松谷氏に、「必ず赤ちゃんの文学がある」と赤ちゃん文学の道を示したのは、童心社の初代編集長・稲葉桂子氏でした。

日本ではじめてとなる赤ちゃん絵本の制作に、ともに試行錯誤を重ねたのは、画家の瀬川康男氏でした。松谷・瀬川両氏にとって初の絵本となった『きつねのよめいり』(福音館書店)を共作したことで、瀬川氏に相談すると引き受けてくれ、誕生したのが『いないいないばあ』なのです。

あかちゃん絵本開拓者たちの苦難

『いないいないばあ』『いいおかお』を皮切りとする「松谷みよ子あかちゃんの本」シリーズの5作目として登場したのが、『おさじさん』です。

瀬川氏に代わって画を描いた東光寺 啓氏は、雑誌や時代小説の挿絵を手がけていた画家で、絵本ははじめての仕事でした。はじめて手がけた絵本が赤ちゃん向けだったため、保育園で赤ちゃんの動作をみたり、話しかけたりして仕事にかかるのですが、それは難しく何度も書き直した結果、納期をはるかに遅れて完成した苦心作なのです。

松谷氏は自身のエッセイ集に、瀬川康男氏が赤ちゃんの仕事を続けるということはしんどかったらしいと綴っています。

「『お山を越えて野原を越えておさじさんがやってきました』などという文章に絵を描くということは、男性にとって至難のわざで、途方にくれるのかもしれない。いったいどうしておさじが山を越えてくるんですと、画家は頭をかかえ、だってそうなのよと私はけろっとしていう。」

瀬川氏は「あかちゃんの本」4冊の絵を描いたのち、『おさじさん』の画を断念したため、東光寺氏が担当したのかもしれません。本当のことは知る由もありませんが。

フェミニズム作家の先駆者・松谷みよ子

日本における赤ちゃん絵本の開拓者である松谷みよ子氏は、18歳のときに執筆した童話『貝になった子供』で、1951年25歳のときにデビューしました。2015年、89歳で生涯を終えるまでに出版した書籍は、570余りに及びます。

日本を代表する児童文学者として知られる松谷氏ですが、その文学領域は赤ちゃん絵本や幼年童話に留まらず、戦争や環境問題を背景とした児童文学、民話の再話、創作民話、ひいては自伝に小説、評論、エッセイと幅広いジャンルにわたり、あらゆる年齢層に向けて書き続けました。特に、各地方に伝わる民話を「祖先からのおくりもの」として日本全国を歩いて採集し、書籍化した民話研究者として計り知れない功労者なのです。

多岐にわたるジャンルの文学を執筆するとき、対象の年齢・月齢を鑑みて、その発達まで立ち返ったうえで、純粋なエンタテイメントとして、心ゆさぶるファンタジーとして、もしくは社会をみつめ生きる素地を養うメッセージとして、その表現に際限はなく放たれています。まだ、その名称もなかった「フェミニズム」の児童文学者が、赤ちゃん絵本の生みの親・松谷みよ子氏です。

文献
1) 松谷みよ子：私の暦(松谷みよ子エッセイ1), 筑摩書房, 東京, pp.210-213, 1989.
2) 松谷みよ子：出会いのとき(松谷みよ子エッセイ3), 筑摩書房, 東京, pp.57-76, 1989.